

陳 情 文 書 表

受理番号	陳情3第24号	受理年月日	令和3年8月30日
件 名	沖縄戦犠牲者の遺骨を含む土砂を埋め立てに使用しないよう求める 陳情		

【陳情の趣旨】

毎年8月は私たちとの国民も平和をことさら祈念するときだと思います。目黒区においても、広島市への平和の特派員派遣、世界の165か国・地域、8,024都市の一員として核兵器廃絶の取り組みに賛同する平和首長会議への加盟など、平和への取り組みに心より敬意を表します。

しかしながら、戦争の惨禍は他国からの攻撃だけが招くものではなく、沖縄に強いられた犠牲が学びと想いの対象になっているようにみられないことを遺憾に思います。来年5月15日の沖縄返還から50周年の日を、私たちはどのように迎えるのでしょうか。

先の大戦で沖縄は唯一の地上戦の地となり、特に本島南部では日本軍の判断による「南部撤退」に多くの住民が巻き込まれ、県民の4人に1人が戦死しました。戦前21あった師範学校・男女中等学校の全ての生徒たちが戦場に動員され、男子生徒のうち上級生は「鉄血勤皇隊」に、下級生は「通信隊」に編成され、女子学生は負傷兵の看護活動などにあたり、半数以上の生徒が戦死しました。集結末期の1ヶ月で全県民戦没者の半数が命を落としたこの場所には、彼ら彼女の血がしみ込み年月を経て風化した遺骨が崩れ土に混ざっています。

この土砂が、埋め立て工事に使われるという人道的危機に私たちは直面しています。この土地を、昨年4月防衛省が埋め立て用土砂の採取地に追加をしたためで、国から受託した業者が採掘を開始しようとしています。これは国のために尽くした戦没者への冒涜に他ならず、国自らがその責務とした戦没者遺骨収集推進法にも反する行為です。これに対しもし私たちが「善人の沈黙」を守っていては、後世へ禍根を残すことは必至です。

これに対し国に意見するなどは目黒区として取り組むことと違うと言われるかもしれません。目黒区には沖縄激戦地で命を落とした人々の遺骨の帰りを待つ遺族の申し出はないかもしれません。しかし本当にそう言い切れるでしょうか。「平和の礎」刻銘者数（令和3年6月時点）における東京出身者数は 3,521名です。

今年他界した私の母は神戸が燃え尽くされるのを疎開先の山上から見ていた子供の1人でした。母は何も自分のことは話さない人でした。欲しがらないことを叩き込まれた戦争体験者の多くは、おそらく生きているだけ、食べたいものを食べられるだけでそれ以上を望まないのでしょうか。

ほとんど行政には届いていないかもしれない当事者の声を補足資料として提出させていただきます。

「世界平和のためになにをしたらいいのでしょうか」と問われたマザー・テレサは答えました。

「家に帰って、あなたの家族を愛しなさい。」

平和とはまず、その足元から始まらなければ、ましてや世界平和など、果たせるものではありません。いうまでもなく沖縄県民は目黒区民にとって同邦です。目黒区の人たちが同国民の心の痛みを感じて沈黙を破り、眞の平和主義者として後世に友愛を語り告ぐ決意のある人であり、それが私たちにとっての故郷・目黒区であることを切に願います。

以上の理由から以下のことを要請します。

【陳情事項】

- 1 沖縄戦犠牲者の遺骨を含む土砂を埋め立てに使用しないよう国に意見を表明してください。
- 2 目黒区が行う平和への取り組みに沖縄の戦禍を学ぶ内容を含めてください。
- 3 2022年5月15日の沖縄返還50周年に向けて区としての記念行事を企画してください。